



「あの親子、また来てくれたんだなあ。子どもたちがずいぶんと大きくなつた気がするが、どこに住んでるんだろう」
振り向くとトーマス館長が立つていてました。三人が何度もお辞儀をして帰つて、いつた後ろ姿を優しく見送つています。

「そう言えば、今日も朝からシントシントと雨が降つてゐる。この前の日も、今日とどうも同じような雨の日だつたなあ。あのお客様たち、今日もあの絵を見つめていたんだろう？」

花の木美術館は小さな小さな美術館です。春から秋までの間に、いつも何かの木の花が咲いている美しい森に囲まれています。館長はトーマスさん。美術館はトーマスさんの描いた絵だけを見てもらうために建てたもので、トーマス館長は今でも美術館の一部屋をアトリエにして、そこから見える季節の花々や小鳥や動物たちを描いています。

A close-up of a character's face, likely a boy, with large blue Japanese characters overlaid. The characters read '雨の日のお客様' (Guests on rainy days). The characters are stylized with a dotted outline.



井手口 良一・作
deguchi Ryoichi

「あの時の幸せうな家族のキツネだつたかどうかは分からなかつたが、かわいそうでね。わたしはその死んだキツネを連れて帰つたんだよ。あのキツネの家族が日向ぼっこをしていた場所に埋めて、そこに石を置いてお墓を造つてやつたんだ」

トマス館長がキツネのお墓を建てた次の日から、不思議なことがたくさん

「いつからだつたかはもう覚えていな
いけど、美術館のすぐ裏にキツネの家
族が来るようになったんだよ」
トーマス館長がどこか遠くを見つめる
ような眼をして話し始めました。
「ひなたの向ぼっこをしていたんだろ? なあ。
夫婦のキツネと二匹の子ギツネはそ
れはそれは幸せそうに、じゃれ合つた
り居眠りをしたりして一日を過ごして
いたんだ。わたしもうれしくなつて描
いたのが、あの絵なんだよ」
「あの絵が出来上がりつて、しばらくした
ころだった。今おなじようになどいか
からマグノリアの花の香りが漂つてき
ていて、シットシットと雨の降つている日
だつたな。森の向こうの街道で、一匹
のキツネが車にはねられて死んでい
たんだよ。側にそのキツネがくわえで
たがる。」

でもそうなのです。が、花の木美術館に
はお客様はまだ一人も来ていません。
案内係のエリーザは時間を持て余して、
受け付けのカウンターに頬杖を突いた
大きなあくびをしていました。

そして、もうすぐ一日が終わりそう
な時間が来た時です。その日初めての
お客様が、ふと浮かび上がるようにな
して、受け付けのカウンターの前に立ちま
した。ふたりの子どもを連れたきれい
な女のひとでした。

「あのー、少し遅くなつたのですが、
まだ入れていただきますでしょうか」

その絵の中には、それはそれは幸せそうに身を寄せ合つて、こちらを見つめている4匹のキツネがいました。

次の日の朝、真っ青な空に気持ちいい風が吹いていて、空気がいい朝でした。いつのものように、美術館の玄関を掃除したエリーザは、受けつけの料金を開けました。そして

お起きました。お墓の周りには誰が植えたのか、きれいな草花がたくさん咲きました。美術館の玄関に季節季節の花や果物が置いてあることもありました。

「そして、去年の、今日と同じようにシャツと雨の降る日、今日と同じようにもうすぐ閉めようかと思っていた頃に、あの親子が来てくれたんだよ。そしてあのキッズの家族の絵を、すいぶんと長いこと眺めて、何度も何度もお礼を言つて帰つていったんだ」

「そういえば不思議なことは次の日にもあつたなあ。前日のにもらつたはずの入场料のお金が無くなつていて、代わりにマグノリアの白い花びらが一枚だけ、良い匂いをさせながらあつたんだ。真っ白いきれいな花びらが萎れもせずにね」

エリーザはぶるつと体を震わせました。寒かつたからではありません。でも、特に怖いとも思いませんでした。それがあつた。

ンをはいて、頭にも同じ色の半ズボンをかぶつて、いました。髪の毛は少しウエーブのかかったきれいな金髪でした。女の子はきれいな金髪の髪を長く後ろに垂らして、男の子の子のうねぎの大きなリボンをしていました。マグノリアの花のように滑らかな光沢のある、真っ白なブラウスを着て、薄茶色のスカートをはいています。ふたりとも真っ白の長靴下に、エナメルのようにも光る黒い色の靴を履いていました。お母さんもきれいな金髪の髪です。それを見ていました。上着は母の子とおそろえていました。上着は母の子とおそろえていました。

透き通ったやさしい声で、そのお客様
は聞きました。

「もちろん大丈夫ですよ。閉館までまだ
30分はあります。あつ、いえ、少しくら
い時間は過ぎても大丈夫ですよ。せつ
かく来ていただきなんですから、ご
ゆっくりご覧ください」

エリーザもつれしそうに言いました。

「ありがとうございます。ここに
入場料を置きます。大人一人と子ど
も二人のぶんです」

「あの、お子様はまだお小さいようですが
から、入場料は頂いていません。お母
さまの分だけ頂きます。ありがとうござ
います」

男の子と女の子はまるで双子のよう
に見えます。お母さんはどちらかとい
る



writer
井手口 良一 (いでぐちりょういち)
1951年5月11日生まれ、1997年大分市議会議員初当選。現在市議会議員5期目。所属会派/おおいた民主グラフ代表。

A handbag with a light green interior and a grey exterior is shown open. Inside, a white flower is nestled in a small green container, and a blue book or notebook lies next to it. The bag has two brown leather straps attached to the top corners.

エリーザは不思議なことに気がつきました。シトシトと降る雨の中を、森をぬけて来たというのに、三人の洋服は少しも濡れていませんでした。ところが三人が立っていた場所は、水溜りがでるほど濡れていたのです。
三人は一枚の絵の前に立つと、そこでずっと立ち尽くしていました。女のはじめは時々目にハンカチを当てていました。二人の子どもたちは両側から、お母さんのスカートをしつかりと握つて、それでも静かにその絵を見つめていました。

「いろ かたち でと てもよく似合つてゐる、きれいな女性 です。」
お母さん がお辞儀をする と、子どもたちも丁寧にお辞儀をしてくれたので、エリー・ザはもつともつとうれしくなつて、
「あのー、良かつたらご案内しましょ
うか。わたし、この美術館の案内係なん
ですよ。」
「あー、いえ、わたしたちは何度もこちらに来て いますから大丈夫です。この子たちに見せてあげたい絵がありま
すので、時々ですが、それを見に森をぬけて来るんですよ。」
「それは、それは、ではどうぞ」ゆづく